
学内活動報告

順天堂大学医療看護学部 医療看護研究19
P.91-94(2017)

第1回臨地実習指導者研修会報告

The First Clinical Instructor Training Program 2016

伊藤 龍子¹⁾

ITO Ryuko

工藤 綾子¹⁾

KUDO Ayako

高橋 眞理¹⁾

TAKAHASHI Mari

幅下 貞美²⁾

HABASHITA Sadami

要旨

平成28年度から3日間の臨地実習指導者研修会を開催した。その目的は、順天堂大学医療看護学部の臨地実習施設において実習指導を担当する看護職者を対象とし、臨地実習指導に必要な能力を高め、臨地実習施設と医療看護学の連携および協働に資することである。今年度は、50人の受講者に対して3日間のプログラムを実施した。その結果、受講者の評価調査票の集計結果では、講義の理解度、知識の習得度、グループワークの満足度において3日間共に概ね良好な結果であった。その自由記載は、肯定的意見が顕著だった。2回課していた課題レポートの内容も理解度が高く、1回目の教育的役割では11類型、2回目の自己の課題と指導者像では18類型に集約され、内容も網羅されていた。以上の結果から、3日間の研修会を開催する意義と効果が示唆された。時間配分や広報等改善しつつ、今後も例年継続していくことが課題である。

キーワード：臨地実習指導者研修会、教育的役割、臨地実習指導者像、実習記録指導、自己の課題

Key words : clinical instructor training program, educational role, clinical instructor image, training records instruction, self-task

I. はじめに

平成28年度から臨地実習指導者研修会（以下、研修会）を年間3日間（8月24日、10月22日、12月17日）のプログラムを初めて開催した。総計8科目16時間に及ぶプログラムを計画し、FD委員会の下部組織である臨地実習指導者研修部会を結成して企画運営を担った（表1）。

II. 研修会の目的と定義

臨地実習指導者研修会とは、順天堂大学医療看護学

部の臨地実習施設において実習指導を担当する看護職者を対象とし、臨地実習指導に必要な能力を高め、臨地実習施設と医療看護学部の連携および協働に資することを目的とした、順天堂大学医療看護学部FD委員会の下部組織である臨地実習指導者研修部会と順天堂大学附属6病院看護部が協働開催する研修会である。

III. 修了証の発行

修了証は医療看護学部の学部長と臨地実習指導者研修部会が発行し、3日間のプログラムを受講した受講者に対して、研修会終了後の修了式において、学部長より6病院の代表者に授与した。

1) 順天堂大学医療看護学部

Faculty of Health Care and Nursing, Juntendo University

2) 順天堂大学医学部附属順天堂医院

Juntendo University Hospital

表1 臨地実習指導者研修会プログラム

8月24日	10月22日	12月17日
看護学教育の基礎	演習Ⅱ：教育的役割（GW）	演習Ⅲ：臨地実習指導
臨地実習指導の基礎		演習Ⅳ：臨地実習指導者像
演習Ⅰ：実習指導のリフレクション（GW）	実習委員会主催の研修会 講演とGW	臨地実習指導の展望（GW） GW経過発表会
リフレクション経過発表会		修了式
課題レポートの提示		課題レポートの提示

Ⅳ. 結果

受講対象者は50人であり、多くの受講者が臨地実習指導の経験の有していた。そのため、多くの受講者が自身の学生自体を思い起こし、経験を通して感じていた意見を活発に交換していた。3日間のプログラムに対する受講者の評価は概ね良好であり、講義とグループワークにおいても集中して学習に臨んでいた。評価に関する調査票の自由記載にも多くの意見が寄せられ、「このような学びの場が欲しかった。」の意見も多く、研修会の開催に対する感謝の言葉、肯定的意見が多かった。中には、「3日間の間を開けずに続けて欲しかった。」「2日間にして続けて欲しかった。」「他のスタッフも参加できるように続けて欲しい。」など肯定的な意見が最も多かった。

1日目は、午前中に講義を受講し、午後からグループワークを行い、経過発表会の後に、課題レポートを課した。2日目は午前中に講義を受講した後に、グループワークを行い、ポスターにて議論の経過を閲覧した。午後は、例年通りの実習委員会主催の臨地実習指導者研修会が行われ、3日間の研修会の受講者も参加した。残念ながら、午前中は3名の欠席者がいた。3日目は、午前中に講義を受講し、午後からグループワークを実施した。大学の教員の協力もあり、いずれのグループも活発に意見交換がなされており、ポスターを用いた経過発表会において学習成果が十分に示されており、3日間の著しい成長が伺われた。

1. 1日目の課題レポートのまとめ

「臨地実習指導者の教育的役割」と題して、課題を課していた。レポート内容を定性的に分析し、類型化を試みた結果11類型に集約された。保留となる記載内容は皆無だった。

受講者の意見として最も多かったのが【学生を個人として尊重して立場に配慮しながら支援する役割】で72件の記載内容があった。具体的な内容としては、「学生が何を考え、どのように感じているのか、学生の言

表2 臨地実習指導者の教育的役割

No.	類型	件数
1	学生を個人として尊重して立場に配慮しながら支援する役割	72
2	臨地実習指導者の力量を発揮して学生の学びを促す役割	34
3	大学教員と連携および協働を土台として学生を指導する役割	29
4	看護師の役割モデルを提示する役割	28
5	看護部門を主とした実習環境の整備と調整的役割	27
6	看護自体の楽しさと魅力を伝授する役割	11
7	学生をチームの一員として受け入れて支援する役割	9
8	看護過程の展開を効果的に支援する役割	8
9	受け持ち患者を通して看護を実践できるよう支援する役割	8
10	専門職としての思考と実践能力を高める指導と自己研鑽	6
11	学生の教育背景を理解して支援する役割	4

葉に耳を傾け、理解し認めて行くこと」「学生を理解しようと歩み寄ること」「実習生の自尊心を尊重した関わり」などであった。続いて、【臨地実習指導者の力量を発揮して学生の学びを促す役割】で34件の記載があり、内容としては「ティーチングやコーチングを状況に応じて使い分けて関わること」「学生が実践したことを評価しフィードバックすること」などであった。次は【大学教員と連携および協働を土台として学生を指導する役割】29件、【看護師の役割モデルを提示する役割】28件、【看護部門を主とした実習環境の整備と調整的役割】27個の順に多かった。意見としての数は少なかったものの、重要な意味が込められた6類型があった（表2）。

2. 3日間終了後の課題レポートのまとめ

「臨地実習指導における自己の課題と指導者像」と題して、課題を課した。レポート内容を定性的に分析し、類型化を試みた結果18類型に集約された。今回も

保留となる記載内容は皆無だった。

意見として最も多かったのは、【病棟全体で学生を受け入れる体制作りのための実習環境の整備と調整】36件の記載内容があった。主な内容としては「全スタッフが実習の目的を理解し、同じように指導が出来るように学生とスタッフの橋渡しをする役割がある。」などであった。次に、【効果的な実習の確立に向けた指導者と教員の相互連携】27件、主な内容としては「学生、教員とのコミュニケーションを取り、学生の実習に対する考え方や教員の指導方法を理解する。」などであった。さらに、【学生の個別性に応じた指導のための学生の尊重と理解】25件、【学生に対して肯定的姿勢で関わる教育的役割の遂行】23件、【学生に対して看護職としての役割モデルを示す努力】20件、【教育的能力の向上を目指した自己研鑽の継続】20件、【学生と一緒に学び成長していく姿勢】16件、【学生の学習意欲や気づきを促す確かな指導】15件、【学生に自己の看護観を言語化して伝える努力】13件、【看護実践の魅力を伝える指導者の役割】11件の順に続いていた。意見として数は少なかったが、【将来の仲間を大切に育てるという認識】6件、【受け持ち患者の全身状態に関する説明と指導】5件、【学生と相互理解

のためのアサーティブコミュニケーションの強化】4件、【実習期間内の時期に応じた指導】2件、【就職時のリアリティショックを軽減できる指導】、【実習目標達成のための実習内容の調整】、【実習はヒューマンケアを行うための指導】、【学生のアセスメント力を習得できる指導】がいずれも1件ずつだった。

V. 考察

例年、本学部では臨地実習指導者研修会を1日もしくは半日のプログラムであった。以前から、医学部附属6病院看護部門からは、3日間の開催を切望していた。臨地実習指導に関する継続教育は、3日間の開催に拡大することによって本学部と病院看護部の相互連携が効果的に図られ、実習環境の向上に資するものである。本学部が大学教育に移行して10年以上を経過しており、卒業生の層も厚くなりつつある。そのため、卒業生や病院の看護職者の大学院への進学も契機ともなり得る。

文部科学省は、臨地実習の充実にに向けた方策として、【学生の看護実践能力の到達度の適正評価】と【臨地実習指導体制の基礎づくり】の2つを打ち出している。中でも【臨地実習指導体制の基礎づくり】には、1) 身体に直接影響を及ぼす技術実習、2) 学生を含めた共同カンファレンスの充実、3) 大学と看護実践施設との関係、4) 学生へのモデル提示の重要性を掲げている¹⁾。これらについて大学と看護実践施設が相互に共有して方策を講じなければならないことが理解できる。また、文部科学省は、看護学教育に関する検討会の経緯において、看護系大学の調査を実施し、実習施設との連携のために実施していることとして、大学と実習施設相互の講師派遣と実習指導者研修会が上位に挙げられていた²⁾。相互の連携のためには、実習指導者研修会は不可欠な展開であることが示唆された。

先の【臨地実習指導体制の基礎づくり】を実施するためには、病院看護職者と大学の教員が一堂に会してきめ細かく検討することが望ましいと思われるが、現実的には多大な困難を伴う。このような制約が伴う実情において、病院看護職者50~60人を受講定員として、可能な限り対応可能な教員と共に臨地実習指導者研修会を3日間開催し続けることに意味があると考えられる。

細田らは、関東圏内の500床以上の38病院に所属する「現在(調査時)、実習指導者としての役割を担っている」看護職者902人を対象に指導上の困難とその関連要因について報告している。因子分析の結果、実

表3 自己の課題と指導者像

No.	類 型	件数
1	病棟全体で学生を受け入れる体制作りのための実習環境の整備と調整	36
2	効果的な実習の確立に向けた指導者と教員の相互連携	27
3	学生の個別性に応じた指導のための学生の尊重と理解	25
4	学生に対して肯定的姿勢で関わる教育的役割の遂行	23
5	学生に対して看護職としての役割モデルを示す努力	20
6	教育的能力の向上を目指した自己研鑽の継続	20
7	学生と一緒に学び成長していく姿勢	16
8	学生の学習意欲や気づきを促す確かな指導	15
9	学生に自己の看護観を言語化して伝える努力	13
10	看護実践の魅力を伝える指導者の役割	11
11	将来の仲間を大切に育てるという認識	6
12	受け持ち患者の全身所遺体に関する説明と指導	5
13	学生と相互理解のためのアサーティブコミュニケーションの強化	4
14	実習期間内の時期に応じた指導	2
15	就職時のリアリティショックを軽減できる指導	1
16	実習目標達成のための実習内容の調整	1
17	実習はヒューマンケアを行うための指導	1
18	学生のアセスメント力を習得できる指導	1

習指導者が認識している指導上の困難の因子構造として、「実習指導者自身の力量に関する困難」、「学生との心理的距離に関する困難」、「学習環境・学習内容に関する困難」、「学生以外の対人関係に関する困難」の4因子が抽出された³⁾。これらの困難因子は、今年度の研修会に参加した受講者が抱えている困難と一致しているものと思われた。その結果として、3日目終了後のレポート内容の分析結果に表れており、自己の課題と指導者像が網羅的に抽出された。特に目立ったこととして、学生の尊重と理解、歩み寄りに関する課題と自己の看護観の伝授や役割モデルの提示に関する課題が色濃かった。

岩田らは、8科目16時間の実習指導者の基礎的能力形成の研修を開催し、実習指導者としての資質・能力に関する認識を研修前後で調査し、参加者の認識の特徴及び研修の効果を検討している。研修前は、実習指導者としての資質及び能力に関して重要性は高く認識していたが、今の自分にはあまり備わっていないと認識していた。研修前後の比較では、資質の項目である〈優れた看護実践〉の項目の得点が有意に高くなり、能力の項目では、〈教育課程、目的理解〉〈教育環境調整〉の項目で自分に備わっている認識が有意に高くなり、〈学生との関係形成〉の項目の重要性の認識が有意に高くなっていた⁴⁾。前述したように、自己の課題と指導者像のレポート内容の分析結果と一致しており、学生の尊重と理解、肯定的姿勢での関わりなど学生と同じ目線や共に学び合う内容が抽出されていた。

これらを総合的に考えると、研修会の効果は歴然と思われ、3日間の評価用調査票への記載内容を見ても受講者の認識の変化が認められていた。

今後も今年度初めての拡大された研修会だったが、寄せられた意見を基に一部場所の広報の仕方や用いる資料の工夫など更なる検討を加えて8科目16時間のプログラムを例年展開していくことが課題である。基礎的能力の形成のプログラムを当面継続しながら本学部における看護継続教育に対する役割を明確にし、更なる向上を図る努力が求められていると思われる。

VI. 結論

今年度から、臨地実習指導者研修会を3日間、8科目16時間のプログラムを実施した。主な内容は、看護学教育、臨地実習指導、実習指導リフレクション、教育的役割、実習指導に生かすアサーション、学生との

コミュニケーション、臨地実習指導、臨地実習指導者像、臨地実習指導の展望である。

3日間の評価用調査票の評価結果と自由記載、教育的役割、自己の課題と指導者像のレポートの分析結果を通して、研修会に参加したことで、実習指導者としての資質、教育課程や目的理解、学生の尊重と理解において認識が変化し、深まったことが示唆された。今後も本プログラムを例年継続しつつ、本学部の看護継続教育における役割と今後のあり方について検討していくことが課題である。

VII. 謝辞

今年度、本学部FD委員会を通して、研修会の開催に関する検討を土台とし、下部組織として臨地実習指導者研修部会を結成し、企画運営を試みることができました。偏に、植木純学部長、本部会委員、FD委員会委員、附属6病院看護部長をはじめ、看護部関係者の皆様方、3日間のプログラムにご協力いただきました講師、ご参加およびご協力いただきました受講者の方々に心より感謝申し上げます。

また、快く研修場所を提供していただきました本学国際教養学部の木南英紀学部長には一方ならず感謝申し上げます。

文献

- 1) 文部科学省 臨地実習指導体制と新卒者の支援。
〈http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/02040c.htm〉
- 2) 文部科学省における看護学教育に関する検討の経緯。〈http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/.../2016/.../1379378_03.pdf〉
- 3) 細田泰子, 山口明子: 実習指導者の看護学実習における指導上の困難とその関連要因, 日本看護研究学会雑誌, 27(2), 67-75, 2004.
- 4) 岩田浩子, 奥百合子, 和野千枝子, 他: 臨床実習指導者研修会の効果の検討, 研修会参加者の実習指導者としての資質・能力に関する認識の変化から。〈http://www.jiu.ac.jp/books/bulletin/2013/nurse/03_iwata.pdf〉
- 5) 山田知子, 堀井直子, 近藤暁子, 他: 看護学生が認知する臨地実習での効果的・非効果的な指導者の関わり, 生命健康科学研究所紀要, 17, 13-23, 2010.